

2021/09/09 ながい路地を過ぎると鬱蒼と生い茂る草むらで腰から下は消えてしまい腰から上はくもの巣だらけになった。向こう側に着いたその河原には成り立ちの異なる東西の山の岩石が合流した川面の上に現れていた。そのあちこちごちゃごちゃ置かれた河原から小石を拾い上げ川面の先を探してみる。拾い上げた一四九の漂礫。背負い歩いていると鬱蒼と生い茂る草むらから垣間見える川面の流体が変形を繰り返しながら移動する北上川と豊沢川との間を自由に姿を変え流れにまかせ流れていた。水源の山から長旅を経て流れ着き拾い上げた石は岩で削られ石同士で磨かれ角が取れ丸く平たい形になった。岸边から川面に投げ跳ねる水紋は川底の瀬に広がっていった。2022/04/23 北上川の袖の渡り。みなかみを伝って風は吹いて来た。朝方から静まり返った岸边に身を屈めると、水面を渡ってくる風があった。つめたい。花曇りのそよぐ風が、身を屈め移り伝わってきた。人影が静かに投げる。写り込む水面が静かに投げる。投げ込む水紋は静かに拡がった。引き返してゆく波のもと、岸边に転ずる小石のざわめきと水没した川底へ沈んでゆく感覚を覚えた。影だ、言葉の影だ。すべて影、影を凝視した先に川底の瀬と広がり。影という影が消え、太陽が頭上に輝くその日、記憶をあたらしい光にみがいしておく。それは、白い敷物の中にあって河川敷で眠っていた語句が、ぐっと起き上がってくる。そんな思いがするからだ。ことばの詩の柱が、読むものに立ち現われ、そこに正しく直立するからである。